

中村俊定文庫
文庫 18
394





上序

少と一海まともと集れは莫師
發をれまひ森抄ひくら何ち
そのまの純一の地みり門人
誰うまは深切り句法無一
文を揮ふ予も一句と送るこ
ひと下みちるるあふ何あそ



山を所別しては花の雲 安心

我よりこそそらの春は暁 春大

けりも守りけし半雷をぬらひ
予り 岡宮舎紙叩て納涼戯画を
とよよりや予り画をききんくまの
新と新せと春水まかのさゆに
そるる色のみありそあはれん
秋の月よ

白く 海をふあひの
手より 春ふるく 静し
さびし にはおのりかた 控ふる
神あり 帰る 社中の人
清し おのり 春とら けり
身より 燕の照玉り 拓涼の
珠ととも 春の 悠然
長き 涼し 悠然



室曆十二壬午の〜〜夏

室曆十二壬午の〜〜夏
 師婆の船〜〜
 あむ〜〜
 家〜〜
 ち〜〜ぬ

婆心

顯公家涼

夕のゆく扇若垂る涼の乳

機石

一鈴風のこゝろに吹かす

雷堂

天兒と遠きも醒くまきて

白牛

神を海隠れ秘密くもぬ

南羅

伯糸のそわろかたの月

眠江

吾々の峰の山元山

箕山



題山伏涼

帆の風を新に度して涼哉

水香もその法標は涼なる

あきの志のうらみもあつて

まどく祥目もあつて

多珠の綿も八日の月もあつて

あつて免海も猫もあつて

桃鏡

雷堂

白牛

雨磧

花明

仙衣



題傾城涼

涼——さも涼る秋毎也不ニ幾波

楚水

揚をうらるよ樹乃次ぬき

雷堂

只飲も時と通樟の笑をそそ

白牛

此庚申も君り代あはれ

桂山

夕月とまのいそくあきこえ

牛東

雲々々々あや守新の秋風

梅峨



題出家涼

朕をよみてしゆく涼か 魚文

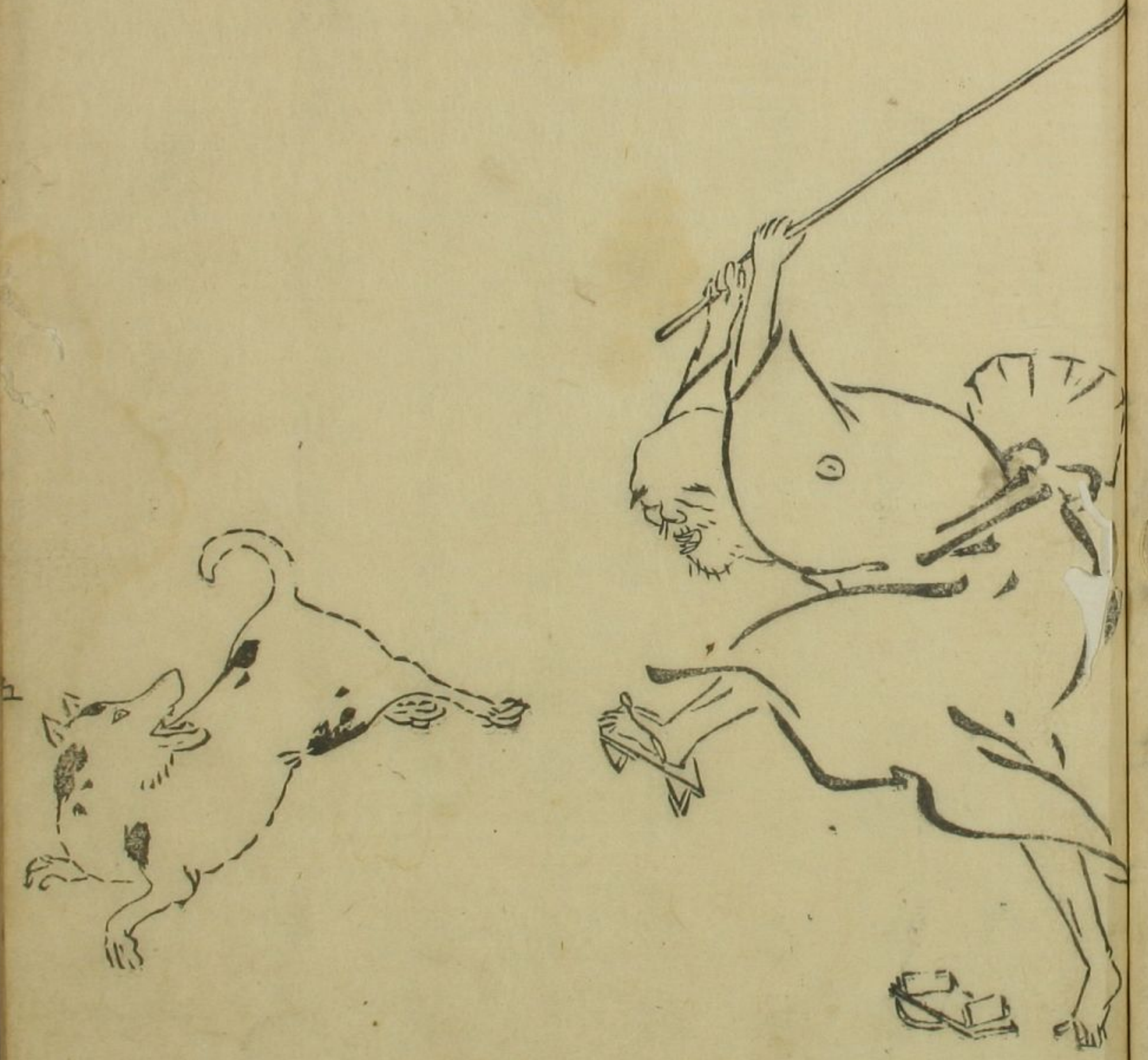
ゆきりく指をきて他塵生 雷堂

利すけの喰ふへくく漕せて 白牛

あくと馬乃おとのそひ 蓼野

伊乃口舌およそ長まらる 六渡

かへりきりて大桶雜面 如風



題 座 頭 涼

換換と膝く吹く涼の如

急扇より多て琵琶の方月

新瓦の茶のり風雅の上もふ

一書風名のいざくとそり

お高れそも初瀬とゆくとに

あつらふとまよふ松の村白

嵐腹

雷堂

白牛

帰景

栗林

山史



題百性涼

白月と解てや村乃夕々々

枝真

端よりち守門の次汁

雷堂

葛道の童子格子の活なまて

白牛

巧て若きうゝ吾ふあふ

波光

飛津の初とがんと風乃月

圻山

瓶とおよちや種とて

少言

春之部

漸くと十日れるやわさう

石中

只いとみ海一とてあ海る

望水

そまの山家の夕日と夜と様と

吏仙

葉の水とそとぬ方ぬ也胡里山

信夫

け真子と住人何れと核う礼

宜中

ヨのふりふ奥子とて破岩と

花吹

水きりしはふよの何り川極

金沙

傘くくすの暮るし一紙月 暮把

松さくや松くさめり月ひらり 如雲

まむまむく雪れ一もあやぬひる 如雷

蝶もあつて成るを葉の跡外 如菊

もろとも人若かひる様ふ 仙衣

眼も又中よの何りま書存か 婆心

白くまほほぬを水ひん 吐月

つらつらやち急はるる、屋の先 兔守

むけしんまふて様くのふ 拙之

お茶鞠かいつらつらや 茶柯

晴る時平候と暮るひよりふ 眉山

系と水て人約とせし極くふ 自来
櫻戸やとくぬ男れがよも又 友路
裾心の程とるくしゆさく 白羽
やうくと物とゆくと城が 若一
友進く新くき印の極く乳 核石
る極や積くこりて日のま 女風
けとれ右とひさりや新ふれ 祝半

舞とて極の都を流るるれ 斑象
約女の程とけし極く那 桑林
うとけ手や籠へ入るハ業乃白 改系
出代やうくありてゆ程のま 山史
家くの海や見てかくと峰 桂山
針とゆくと花ひとゆとまれ 雷車
海山の海と海とや行るる月 核峨
うくとすの行とつげと 萼約

紫くの後端もや草一 眠江

そよもやきくもる月八州おん 箕山

海素や子か時さめくく華の夏 碧研

そよゆもやほふりつるあこり 盈ひ

大石のかりはぬ帯ももまうふ 耳坊

そよやあめくさう草の中 窪山

ちりけハ幸ふものも知子のあ 金龜

朝ハまこ木想申如山さくらん じ兒

まろむ如枕くくあふ紫いとけ 子夏

浮草もや糸ハ流く揚いまり 葵旦

紫くも葉くもあふあひとけ 吹光

人おく風さうこ守柳ふ 圻山

雛のけりもさうもくお一る 少言

くろのよもせうくしと海つと
歌ふりもはむ佐のぬき香るれ
石ころしと鹿とあはれ梅のふ
馬老 都准 左更

啼もれ下口もあつと山桂
まゝもや都と傘のまゝをり
大耳 元子

夏之部

まゝ雲の程を荷くも梅乃実
石中

まゝ海くまはれぬ糸はかりと紫
風おぬもれ海くもみさくく
たゝもとのぬかぬぬ水霧外
祇屋今も都のふれきり月夜
うさゆわ陸く咲ときゆくく
夷仙 信夫 宜中 花明 成江

又山ゆえとあま里やまらか
金沙

一寸の風を吹くやも文
世も傷むや旅のゆくは
物云
晴るる雨の晴るる月雨
花菊
月もて好し習ふも
仙衣

世も傷むや旅のゆくは
婆心

帰場も足るる相乃ふ吐月
川野中細く遊ぐ松の月眉山
月もるる山乃澄の光
揺之
みゆや日く見ゆる風の教
萩栞
細くもよみおほし
杜若
鬼さ

志ももつと汗基の目ふハ
如雷
新月もつと
山奴

中野色のほなちあきの牡丹紅 牛東
刈込の日しとくし夏の秋 遠平

昔見しの案内とひと月夢紅 菊古

一輪の舞と真阿る牡丹紅 南陸

志の免やまこ文乃らるかこき 雪嶺

下りて月の影らる水鏡外 六渡

綿ぬらてりうき系保とねる危 沢家

十日くくるるれも物の牡丹外 百破

晴るま乃乃志まひあー杜み 自来

田樂のやうく舞る秋の異外 友崎

くさくさのゆりゆりゆり異外 白翅

水の母とワタリあかり涎き唇 芦一

子あきも極て漸き田つー外 如風

向ふく日と追水らる田外 観本

遠くの一みくもく 庭もさ 女愛

卯水のりちく 咲く 白丁花 斑象

春の文木の宮乃 乃言やかんこを 瑞象

藤花やまれ中しく 秋のゆるる 山史

言いと月探り ちりちり 舞あま 桂山

今信れ 出れ 水く 庭る 姑あま 夏車

とと 知の ちあまや 水く 汐さうひ 梅我

とと あま 帰る 風や 梅ととと 暮野

紫蘆畑や 言れ 中け 風の 色 箕山

とと 最を 月く 海け 新く 舞我 習舟

とと 後の 枝く ちれ 是く ちる 葉林

我を とと 命く 命の ち 百合の 系 盛り

筆や 初白く ち 冬の 影け けし 耳如

一ツ 家の 障乃 言や かんこを 滝山

藤のふやら〜何〜岐工をり
し児

華や暮と〜のあな〜
子来

後立てるぬり〜芥子のあな〜
令危

水多れ果し〜水や多〜
波光

人あゝのさけ〜明〜
圻山

寂然子傳矣〜し〜
少言

旅観〜〜雪起す後〜
馬荒

章と又人の城や木下 留 却雁

と〜〜と〜披〜〜あれ九折 左更

く〜〜と〜不二〜〜和〜〜 大耳

あ〜の方乃〜眼〜中〜と〜星〜 鴨川外 兀子

望人と〜〜〜へ〜碓と〜新抽外 蓼旦

ま〜あ〜や〜白〜と〜〜侍〜小山 伏 尻亭

啼ぬ如く捨て給うる 郭一公 因林
 拙、版之印をく 仰一 苔のむ 人左
 ありのまゝく 落るや 白牡丹 白牛
 ありのまゝく ぬるく 涼く 氷 雪堂
 なくさぬ 雪と 踏まへて 出なれ 暮太

雪中庵



77
 00

